Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

図書紹介 赤木和重著『アメリカの教室に入ってみた：貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで』

金丸，彰寿

(Citation)
研究論叢,24:99-101

(Issue Date)
2018-06-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010524

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010524

5．図書紹介

赤木　和重　著

『アメリカの教室に入ってみた　貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで』

金丸　彰寿（神戸大学大学院博士後期課程）

本書は、アメリカ合衆国のニューヨーク州に位置するシラキュースでの１年間（2015年３月～）の在外研究の成果をまとめた著作である。日本で日々、葛藤し奮闘しているであろう学校の先生及び保護者の方や、アメリカの公教育の現実を知りたいと考える人々に向けた著作である。本書の趣旨は、シラキュースにおける著者の実体験を踏まえて、①「貧困地区の公立学校の様子」、②「日本とは異なるインクルーシブ教育の様子」、③「新しいインクルーシブ教育を展開している私立学校の様子」を紹介することである（3-6頁）。本書では、インクルーシブ教育について「障害のある子どもや外国籍の子どもなど、学校教育から排除されがちな子どもたちが排除されない教育」と定義されている（4頁）。発達心理学及び特別支援教育学を専門とする著者は、アメリカの教育事情を紹介することに留まらず、日本の教育実践、とくにインクルーシブ教育のあり方を問い直すことを意図している。

本書の構成は以下のとおりである。なお紙幅の関係上、３部のそれぞれの章タイトル及びコラムタイトルのみを記すこととする。

はじめに

第１部　貧困地区の公立学校―公教育の崩壊

序　　シラキュースという街
第１章　貧困地区の公立学校
第２章　貧困地区の子どもの体
第３章　貧困地区で暮らす子どもの言葉と思考
第４章　遊びが消える幼児教育
第５章　チャータースクールの光と影
第６章　日本との違い―子どもではなく教師・教育
補　章　アメリカ公教育の底力―トランスファー・ハイスクール
【番外編】学校ランチ事情

第２部　インクルーシブ教育の異なるかたち

第１章　公立学校におけるインクルーシブ教育の実態
第２章　Mind your own business ―自分のことをしっかりと
第３章　卒業式
第４章　優れたインクルーシブ保育に学ぶ
第５章　優れたインクルーシブ保育に学ぶ（その２）
第６章　インクルーシブ教育の異なるかたち

第３部　インクルーシブ教育の新しいかたち

第１章　小さな私立学校とインクルーシブ教育
第２章　New School の概要
第３章　流動的異年齢教育
第４章　流動的異年齢教育を可能にするもの―個別化・協同化・プロジェクト化
第５章　流動的異年齢教育の意義
第６章　インクルーシブ教育の新しいかたち

—違いに大事にしながらつながる
結　び　　アメリカを通して日本の教室を考える
おわりに
コラム
タイムアウト
Teaching personal
多様性の中で学ぶ子どもたちの息づかい
裁判を受けてきました

本書の構成を見ると、それぞれの部が上述の3点の趣旨に対応する形に整理されている。

第1部では、貧困地区のシラキュースの公立学校の現実が紹介され、アメリカの公教育が崩壊に向かっている現実が論じられている。「アメリカで貧しく、かつもっとも分離・排除が進んだ街の一つ」であるシラキュースの教育状況については、基礎学力の定着が著しく不十分である学校が多く、その内、貧困地区の学校については輪をかけて深刻であるという（序）。そもそもアメリカの貧困地区の学校の様子が充分に解明されていない現状において、著者は複数の公立小学校や幼稚園、保育園に入り込んで、それらの詳細を記述している（第1章～第6章）。著者によると、学校によって比率は異なるが、黒人の子どもが多く、その他にラティーノ（ラテンアメリカ系）、ソマリア、スーダン、ネパールから難民として来た子どものように、様々な人種の子どもが在籍している。こうした子どもたちの様子について、発達心理学の観点から、「ほかの子どもと『息を合わせる』ような協調性」や「言葉の少なさや語彙の偏り、」「考えることへの耐性のなさ」などの「学力の根っこにあたる発達の貧しさ」が課題として指摘されている。さらに低学力が喫緊の課題である貧困地区の公立学校が、学力向上のために「成績」「学校評価」を主眼に置く教育を行ってしまう課題も指摘されている。このようにアメリカの公教育に批判的なスタンスをとる筆者であるが、高校を中退した生徒を対象にするトランスファー・スクール（子どものいる高校生のための保育所も設置）を紹介し、子どもや青年の学習権を保障する「アメリカの公教育の底力」を感じる取り組みがあることも示唆している（補章）。

第2部では、シラキュースの複数の学校におけるインクルーシブ教育の取り組みが紹介されている。シラキュースは、アメリカの中でも、とくにインクルーシブ教育を推進している街であるという（第1章）。著者は、シラキュースの貧困地区のインクルーシブ教育（第2章～第3章）及び私立幼稚園「Jowonio（ジョボーニオ）」のインクルーシブ保育（第4章～第5章）について紹介しつつ、日米のインクルーシブ教育の「異なるかたち」を総括している（第6章）。総括部分を摘要すると以下のとおりである。「シラキュースのインクルーシブ教育は、differenceとindividualに価値を置く教育」であり、「違いを重視し、個々の活動を重視する教育」である。対して、「日本のインクルーシブ教育は、samenessとrelationshipに価値を置」き、「皆と同じ（一緒・一斉）ように学ぶことを重視し、かつ友達同士のつながりを重視する教育」である。つまり日米のインクルーシブ教育の違いは、日本のインクルーシブ教育において子ども同士の「つながり」を重視するという自明性が、必須の条件になるとは言い切れないことを示唆しているのである。さらに著者は、「学習形態の枠組みを変えずに、同じように学」ぶ枠組みを保持した日本のインクルーシブ教育を進める場合、発達障害のある子どもなどをその枠組みから「こぼれ落としてしまう」恐れがあると指摘している。このことは、現在インクルーシブ教育が推進されつつも、特別支援学校・学級の在籍児童生徒が増加してい

るという矛盾した状況の要因の一つであると指摘されている。

第3部では、「The New School」のインクルーシブ教育が紹介され、第2部で検討した日米のインクルーシブ教育とは異なる、新たなインクルーシブ教育の方途について論じられている。「The New School」は、幼稚園から中学校に該当する年齢層の幼児・児童・生徒が全32名在籍しており、学年・学級制ではなく、異年齢教育を採用している学校であるという（第1章～第2章）。著者は、「The New School」の特徴として「流動的異年齢教育」を挙げている（第3章）。「流動的異年齢教育」とは、子どもによって学習内容が多様に設定されつつ、それに応じて集団のサイズや質が構成される教育であり、全ての学習活動が「異年齢集団」で限定されない教育であるという。この「流動的異年齢教育」を可能にする要素として、①「こどもそれぞれの特徴に応じて指導する」「個別化」、②1日の時間割の中で学習集団の質やサイズを多様に構成しつつ「ともに学ぶこと」を促す「協同化」、③ある設定されたテーマをもとに調べ学習を行う「プロジェクト化」があるとされている（第4章）。「流動的異年齢教育」の意義は、「自己肯定感が高くなる（正確には自己肯定感が低くならない）」、「社会性の発達を豊かにする」、「『障害』という言葉をことさら意識しなくてもいい」ことの3点を指摘している（第5章）。こうした特徴と意義を有する「The New School」は、「個々の違いを認めながらつながりを大事にする」「新しいかたちのインクルーシブ教育」であると指摘されている（第6章）。そして「流動的異年齢教育」は、「皆と同じ」「『つながり』を重視」し「同年齢で教えたほうが効率がよい」という「同年齢学級主義」を前提とした日本のインクルーシブ教育を問い直すことに寄与すると結ばれている。

以上が、本書の概要である。著者は、家族と共に渡米しており、家族とアメリカの人々とのかかわりを通じて、本書を記述している（とくに第3部の記述は非常に興味深い）。著者の教育に対する、冷静でかつ温かなまなざしでまとめられた著作であるといえる。

若干ではあるが、本書を通読して感じた意義を述べて結びとしたい。第1に、本書はシラキュースという一地区を中心としつつも、アメリカ公教育の多様性と複雑性を明快に示しつつ、日本の公教育に示唆づけるという一貫した視点を有していることである。第2に、インクルーシブ教育の諸実践を通して、インクルーシブ教育の概念を整理し、この教育の今後の方向性をも示した点である。インクルーシブ教育の推進は世界的な潮流をなしており、日本でも同様であるが、暗黙の前提となっている感は否めず、「インクルーシブ教育」の理念を問い直しながら実践が展開されているとは言い難い。本書は、アメリカの実践を通して概念的理解で留まっているインクルーシブ教育を批判的に検討し内実を与えようとする点で、今後のインクルーシブ教育研究において示唆に富む。なお、本図書紹介では触れることができなかったが、本書に収録されているコラムは、学校の教育事情や子どもの様子はもとより、アメリカの司法の様子などについて知る上でも興味深い。

（ひとなる書房刊　2017年1月発行　本体価格1,700円＋税）